

世界に認められた「記憶」

第2次世界大戦が終結してから今年で70年が経ちました。70年前の舞鶴の様子を覚えている人が、どのくらいいらっしゃるでしょうか。終戦から13年間、舞鶴には「引き揚げ」の歴史がありました。そこには、舞鶴港への引揚者、約66万人の帰国までの苦難の道があり、それを温かく迎え、受け入れた市民の姿がありました。歴史は未来に生かしてこそ、価値がある。過去の歴史を振り返

り、未来はどうあるべきかを考えることが平和につながる。そう考え、市は、引き揚げに関する史実を語り継ぐことで、舞鶴から一人でも多くの人に平和の尊さを発信するために「ユネスコ世界記憶遺産」への登録を目指してきました。そして、多くの皆さんの思いや情熱により、その目標は達成されたのです。市民の皆さん、今一度、引揚記念館の資料を目の前に見てみてください。そして、資料から伝わる多くの人々の思いに触れてみてください。そして私たちが、世界の記憶として次世代へと平和への願いとともに語り継いでいきたいと思います。

〈資料の概要〉
～ ユネスコへの推薦書から ～

「舞鶴への生還 1945-1956 シベリア抑留等日本人の本国への引き揚げの記録」は、第二次世界大戦の敗戦にともない日本帝国が崩壊する中で、ソ連領に抑留された約60万人から約80万人といわれる日本人軍人と民間人たちの、筆舌に尽くしがたい抑留生活と日本本国への苦難に満ちた引き揚げの歴史を伝える資料である。

彼らの本国への引き揚げは、終戦から11年を経た1956年に終了するが、ソ連はすでにドイツ人等の旧敵国側の軍人と民間人の抑留を同様に行っており、日本人の抑留もその一環としての同時代的意味を持つ歴史的出来事である。また、抑留と引き揚げは、戦後の日本では、国民が戦争のない平和な世界を希求する上での大きな礎となった稀有な体験として、後世に語り継ぐべき大きな戦争の記憶となっている。

当該資料は、意に反して抑留された抑留者たちの困窮や絶望、生き抜く力、家族への思いや帰国への希望、そして彼らの帰国を待つ留守家族の家族愛と日本国民の同胞愛など、人類共通の普遍的な主題を伝えるものである。公的記録が乏しい中、奇跡的に現存する当該資料は、第二次世界大戦後の悲惨な惨禍を生き抜いた、一人ひとりの人間性あふれるまさに稀有な、真正無二の世界が共有すべき貴重な資産である。

手作りのメモ帳



シベリア抑留で同じ収容所にいた日本人の氏名などを記した自作のメモ帳。没収されないように靴の中に隠して持ち帰った。工場の労働に従事していた抑留者が段ボール箱や包装紙などを集めて作ったものが多い。メモの内容は、日誌や雑記などのほか、ロシア語の単語を記したものもある。特に多いのは、収容所での苦労を共にした戦友の氏名や日本の住所など。

白樺日誌



シベリア抑留中の日々の様子や心情を文章や和歌などでつづった日誌。紙の代わりに白樺の皮をはいてノートにした。ペンは空き缶を加工して作り、インク代わりに収容所のストーブのすすを水に溶いて記していた。日誌を書いたのは舞鶴市出身の瀬野修さん。書かれた和歌や俳句は約200首にのぼる。

舞鶴引揚援護局で発行された引揚証明書



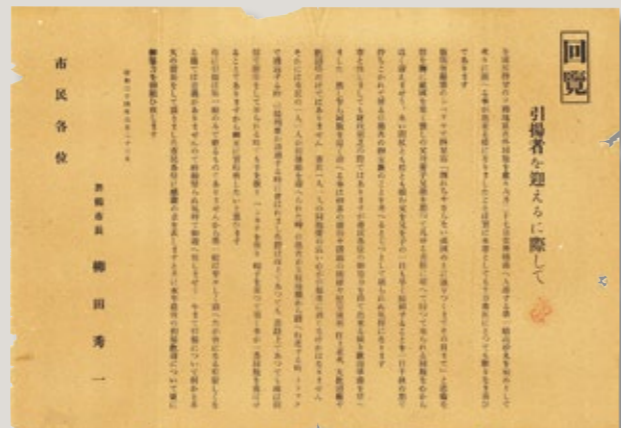
海外からの引揚者や復員兵であることを証明するもの。基本的に世帯単位で発給されていた。内容は世帯主と世帯員の名前や年齢、引き揚げ前の居住地。当時の身分を証明するものの一つでもあり、恩給や配給を受ける際に使用されていた。

俘虜用郵便葉書



シベリアの収容所で一部の日本人捕虜に配布された往復はがき。ソ連側の指示で全文カタカナ書きになっているものもあり、厳しい寒さや労働、劣悪な食糧事情について書くことは許されなかった。

柳田市長からの回覧文



昭和24年6月23日発行の舞鶴市長名で出された回覧文。引揚船の入港にあたって、市民へ心からの温かいおもてなしをするように、市民へお願いしている。当時の舞鶴市民の多くが、引揚船が入港する際には岸壁に立ち引揚者を出迎え、イモやコメを出し合い引揚者に無料で配布していた。

世界記憶遺産とは

Memory of the World

国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)が世界遺産や無形文化遺産に並ぶ三大遺産の1つとして世界の重要な記憶遺産の保護と振興を目的に1992年から始めた事業。古文書や書物などの歴史的記録物が対象。主なものとして「アンネ・フランクの日記」「ベートーベンの手書きの楽譜」などがある。2年に1回、1国で2件までの申請規定がある。

日本では、「山本作兵衛による筑豊炭鉱の記録画」「慶長遣欧使節関係資料」「御堂関白記」があり、今回「東寺百合文書」と「舞鶴への生還 1945-1956 シベリア抑留等日本人の本国への引き揚げの記録」が登録された。

登録された資料は、概要が数か国語に翻訳され、さまざまな機会に全世界へ向けて発信されるほか、資料の保存促進に関する助言や支援も行われる。



「岸壁の母」のモデル端野いせさんが息子に宛てた手紙



シベリア抑留中に描かれた絵画